

第 29 回日本災害医学会で WHO 健康開発総合研究センターフォーラムおよび世界災害救急医学会特別企画に登壇しました (2024/2/22-23)

テーマ：叡智の結集：すべては被災者のために
会場：みやこめっせ（京都・日本）

2024 年 2 月 22-23 日に京都市で開催された第 29 回日本災害医学会において WHO 健康開発総合研究センター（WHO 神戸センター：WKC）フォーラム、および世界災害救急医学会特別企画に、災害医療国際協力学分野の江川新一教授が登壇しました。

WHO が 2021 年に発刊した災害・健康危機管理に関する WHO 研究ガイドランスの日本語訳の総監修をおこなった江川教授は、WKC フォーラムでパネルディスカッションの共同座長を務め、災害医療データ収集の国際標準化、赤十字・赤新月の災害医学研究、ASEAN 災害健康管理研究所の設立と活動、能登半島地震における災害医療対応と研究のあり方、統計学者からみた災害医学研究などについて発表した演者の方々と、「災害医学研究はなぜ必要か」、「災害医療のデータは誰のものか」、「災害医療対応と災害医学研究のバランスをどうとるか」、「若い研究者にむけて言いたいことは何か」のテーマで討論を行いました。

世界災害救急医学会 WADEM の特別企画では、WADEM の前理事長、現理事長から、世界が直面しているさまざまな災害・健康危機についての現状分析・将来予測と、2025 年 5 月 2-6 日に開催される WADEM 2025 Tokyo についての期待が、ビデオメッセージで寄せられました。江川教授はプログラム委員長として、災害リスクと防災における「健康」を中心にする考え方、世界の災害医療に与えるわが国からの発信の必要性について説明し、積極的な参加を呼びかけました。

第 29 回日本災害医学会は 3000 名近い参加者があり、医師、看護師、救命士、行政、自衛隊など多職種からなる実務者・研究者が垣根を越えて議論をしています。令和 6 年能登半島地震の緊急企画も開催され、被災地で自ら被災しながらも地域医療の陣頭に立ち、支援を受け入れる側として 2 月 22 日現在も活動を続けている現地の医療従事者の方々からの生の声が届けられました。少子高齢化が進む能登半島で起きた事象は、今後の南海トラフ地震で避けて通ることのできない事象でもあります。富士山噴火が起きれば、災害拠点病院の機能が障害され、火山灰による交通麻痺、停電、断水など社会機能が大きく低下します。火山、地震、津波などの自然ハザードの研究者・実務者と保健医療の研究者・実務者が情報の共有、適切なリスクコミュニケーション、クライシスコミュニケーションが強く求められています。

文責：江川新一（災害レジリエンス共創センター、災害医療国際協力学分野）

（次頁へつづく）



WKCフォーラムのパネリストと